

9月25日～26日に石川県金沢市で開催された日本精神保健福祉士協会全国大会・学術大会に2年ぶりに参加させて頂きました。全国各地から1,000人以上の参加者が一堂に集まり、活気に溢れていました。今回のテーマである「つなごう”ソーシャルワーク魂の継承”つなごう”新たな実践の創造”」の通り、全国各地の精神保健福祉士がシンポジウムや発表等を通じて、これまでの諸先輩方が築き上げたソーシャルワーク魂を次世代へ繋ぎ、また発表を通して学んだ新たな知見を創造することができたと思います。2日間参加したなかで、特に以下の二つの企画が印象に残りました。

1. プレ企画「魂の継承～呪縛か？それとも〇〇か？きれいごとじゃない現場のリアルを語り合う～」

前半は北陸3県(富山・石川・福井)それぞれで長年活動されている精神保健福祉士がそれぞれの新人時代を含めて今までどのように歩んできたのか、自らの迷いや葛藤等を発表されました。後半はグループワークを通して、自分自身が抱えている葛藤や大切にしていること等を発表しながら、互いの経験に共鳴する時間となりました。普段、職場以外と同業者と深く語り合う機会があまりなかったこと、また(私のグループはほぼ西日本の方かつ病院やデイケアに勤務されている方が多かったため)同じ職種でも地域や現場が異なっても支援者の悩みも多々共通していることもあり、支援者としての姿勢や価値観を再確認する機会となりました。

2. 分科会「地域移行・退院支援」

現在、身体合併症を抱える認知症患者や精神疾患患者の退院支援が困難を極めている現状が示されました。私が所属している医療機関は精神科病棟の他に内科病棟もあるため、多職種の意見を伺いながら支援を行っていますが、全国的に精神科と内科両方対応可能な病院が少なく、精神科単科病院ならではの困難さを聞くことができました。

別の発表では、長期入院者の退院支援を行っても本人の拒否から退院には繋がらず、既存制度では対応に限界があることを痛感しました。制度の狭間に置かれている対象者への支援の難しさ、地域資源の不足、連携体制の課題など、構造的問題があること改めて認識しました。地域連携の重要性を再認識し、支援体制の強化の必要性を感じました。

今大会で得た知見を職場内で共有し、退院支援の質向上に向けた取り組みを進めていき、また、地域資源の把握と関係機関との連携を強化し、制度の限界を踏まえつつ、より実効性のある支援の在り方を検討していくことが必要と痛感しました。

余談ですが…

来年の日本精神保健福祉士協会全国大会・学術大会は、9月3日～4日に岩手県盛岡市で開催されます。今回、栃木県の参加者が少なかったそうですが、実際に全国大会に参加すると、他の地域の同業者と交流を深めることができる、発表を聞いて新たな学びが得られる、実際に職場でも活用ができるなどと想像すると、プラスになることが多いのではないかと思います。ぜひ一度は全国大会へ足を運んでみてはいかがでしょうか。